

# ピアノの先生は 心のお医者さん

HEALING DOCTOR ⑫

佐藤恵美先生



起伏の穏やかな東京郊外の丘陵地、佐藤恵美先生がお住まいの静かな住宅地には、ぼつんぼつんと畑が点在して、のどかな武蔵野の面影がかすかに残されています。『ピアノの本』の大ファンで、ドイツ遊学中も日本から届く毎号を楽しみにしていらしたという先生は、ピアノニストとしても活躍していられっやいます。多いときはコンサートが月に五、六本。忙しくて煮詰まってしまうとき、生徒さんたちに「音楽って楽しいもの」という日頃のモットーを教えることで、もう一度原点に帰るのだと言います。小枝のように華奢な佐藤先生ですが、元氣いっぱい、動作も口調もしゃしゃき。パワーの源はいったいどこに?

## 二〇人の生徒さんに 二〇通りのレッスン

佐藤先生は、六歳から五十歳代まで幅広い年齢層の生徒を教えています。このことが先生ご自身にとってもプラスになっているとか。「主婦の方や、三十歳代の男性、同業のピアノ教師という方も。おかげでOLでもないのにいろいろな社会勉強ができて、すごくためになります。それに子供の発想やアイデアあって、とても刺激になる。相手や大人でも子供でも、教えることで逆に学ぶことが多いですね」

二〇人ほどいらっしやる生徒さん、年齢が違うのですから、教える方も相應に? 「それは年齢による違いというより、それぞれの個性が最大限生かせるようにと考えてのこと。ですから、レッスンの進め方も二〇通りです」

訪れたときはちょうど冬休みで、レッスンも変則的。今日の最初の生徒さんは、魚返<sup>がえりあみ</sup>明未くん(六歳)と真央ちゃん(二〇歳)の姉弟。花と人形がいっぱいのレッスン室に、元氣な姿を見せてくれました。

## 子供の意欲、興味を たいせつに伸ばしたい

先生が明るくにこやかに二人を迎えます。「さあ、今日も挨拶からしようね、こんにちは。明未くんと真央ちゃん、お辞儀をして「よろしくお願いします」。

実は明未くん、まだ幼稚園児だというのに大のクラシック通。先日の発表会では自分から名曲を披露したいと希望して、『小犬のワルツ』を弾いたとか。

そればかりか、だれに教えられたわけでもないのに、作曲もこなすと聞いてびっくり。発表会では自作曲も「初演」したといえますから、モーツァルトも顔負け。最近はそのまねに凝っていて、大作曲家の作風をまねて作曲を楽しんでいます。自作曲

をもとに、シューベルト風、ドビュッシー風と次々にアレンジして、その腕前を披露してくれました。

毎回、次々に浮かんだ曲を持ってやって来る明未くんのレッスンは、自作の曲がメイン。難しくて自分では楽譜に書けないところは、先生が採譜します。「明未くんの場合、今は音感と発想を伸ばす時期。だから、細かいことはあまりうるさく言わないことにしています」

ひとりひとりの個性を大切にしている佐藤先生ですが、レッスンの中で共通して強調しているのは、五線譜に書き取ることとドイツ音名を覚えること。聴音もドイツ音名で行ない、ドイツ音名で歌を歌えるようになると、合格証がもらえます。この合格証が一〇枚貯まると、先生から「ささやかな秘密のプレゼント」がご褒美に贈られます。子供たちは、これがなによりの楽しみです。なのだそうです。

## わかりやすく、親しみやすい レッスンを心がけて

「こんにちは！」次の生徒さんがやって来ました。近藤悠子ちゃん（九歳）です。悠子ちゃんは合格証を三四枚ももらっていて、とても音楽性が豊かな生徒さん。

挨拶のあとバッハのエチュードに取り組

むと、「同じ三拍子でもバッハは違うね。バッハさんはね、こんな長い重い服を着ていたの。だからあんまり早く踊れないね。たつぷりした感じの踊りになるよ。先生もロングドレスのときはゆっくり歩くよ。そうしないとまずいちゃうよ。先生の説明はとてもわかりやすくて、悠子ちゃんは思わずクスクス。

それぞれ一時間のレッスンの内容は、同じ生徒でもその日によって違います。「リズムがよくないときはリズムのお稽古をしますし、カードを使つて楽典を覚えたり、いろいろです。でも必ず五線譜に書き込む練習は欠かせません。一―二段ほどですが、曲や和音の書き取りをします」

生徒にはひとりひとり違った良さがあります。「それを見つけて出し、伸ばしてあげるのが仕事だと思つてゐるの」。たとえば明未くんのお姉ちゃん、真央ちゃんとはとて絵がじょうず。発表会のプログラム作りには欠かせないスタッフです。

## 自分の世界を広げなければ 人には教えられない

大学在学中からピアノを教え始め、ドイツでも教えていた佐藤先生。ドイツに行くまでは「ごく普通に」教えていたとか。「それまではピアノ馬鹿でしたわ。世界が狭か

った。そのことに気づいただけでも、留学してよかった」と言います。

歌舞伎やお茶、お花、日本の文化についていろいろ聞かれるのだけれど、何も答えられない。それでは人に教えられない。なんにでも首を突つ込もう、いろんな人に出会おう、そう思うようになったと言います。「もちろん、レッスンの方法も考え方も変わりました。ひとつのスタッカートでも、一〇の音色を持つている。小さなときから本質的なものに触れさせてあげたい。ときには生徒と踊つて、音楽の楽しさをいっしょに味わいたい。そのためにも、と思つてタップダンスを始めたの」

ドイツにいた日本人のピアノ教師は皆、丁寧と評判ですが、反面、一方通行で教え過ぎてしまう。「私もそうだったと思う」。ドイツでついた先生にまず言われたことは、「僕らはもう、先生と生徒という関係ではありません。音楽をともにすること、互いに刺激し合う、一対一の個人と個人なのですよ」――これは生徒が子供でも同じことだと、佐藤先生は考えています。そして、もうひとつ学んだこと。「鍵盤に向かつて弾いてはダメ。自分の内にももつてはダメ。音楽は言葉と同じ。聞いている人に伝わらなかつたら、意味がない。どれだけ広く、大きく響かせられるかが大切なこと」



6歳にして作曲をするという明末くんも、先生のあたたかい雰囲気のおかげで、のびのびと音楽を楽しんでいます。右上／ドイツ音名で歌えるともらえる「合格証」。右下／明末くんの作曲のきっかけとなった蝶の標本を持つお姉さんの真央さん。



## ぬくもりのある音楽を みんなで楽しみたい

ドイツではホームステイをした三軒とも、食事が終わると「一曲歌おう。恵美、伴奏して」という調子。「さっきまでビールを飲んでたおじさんがバリトンで朗々と歌い始め、ピアノの回りに家族や犬が集まってくるの」。そんな温かみのある音楽を届けたいし、みんなにもそうやって気軽に音楽を楽しんでもらいたい。それが演奏家としても教師としても、変わらぬ佐藤先生の願いなのです。

「ピアノを教えるというのは、音楽を通して人間同士のつながりを学ぶ場なのだと思います。上手に弾くことばかりが大切なのではなくて、ぬくもりのある音楽をいっしょにつくり、楽しむこと、それがいちばんではないかしら」

だから相手の生徒さんのことを知り尽くし、心の触れ合いを大切にしたい。「そのためには私自身のこともさらけ出さなくては」と言います。ときにはレッスンの半分以上がおしやべりに消えます。

「いつも元気で明るい、あの明末くんでも、小学校の受験の前は暗い曲を作ってきた」と分析する先生。実は、もうひとつ目標があります。それは高校時代に出会った



佐藤先生はピアニストとしての活動も幅広く行っています。忙しいときは月に5〜6回ものコンサートに出演しています。

音楽療法に本格的に取り組むこと。「自身自身の刺激にもなると思って。でも、いろんな方を相手にする仕事ですから、まず人間的な器が備わらないと。だからこれは十年、二十年をかけての長期計画です」

音楽を通じて積極的に活動の幅を広げていく佐藤先生。暖かなポリシーを持った先生に、生徒のみなさんもエールを惜しみません。

さとうえみ ●東京都田無市出身。国立音楽大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。同大学院音楽研究科修士課程ピアノ専攻を首席で修了。ドイツ国立デトモルト音楽大学大学院課程を最優秀で修了。滞独中はヨーロッパ各地で室内楽やソロコンサートに出演。帰国後もソロの他、室内楽、声楽の伴奏など幅広い演奏活動を続けている。毎日の朝食やお菓子づくりなど、お料理は大好きな気分転換。優雅に演奏できるようにとバレエも習い、日本古来の香道も趣味のひとつ。